

長春の友人

長春に来て 10 ヶ月が過ぎました。中国の人たちとつきあっていくうちに、その気質やここで暮らすうえで欠かせない習慣を私なりに理解できるようになりました。ほとんどの友人は情に厚くまた面倒見がよく友情、つきあいを大切にします。適当な言葉で彼らを表現できませんが、一言でいえば“熱い男たち”です。

昨日は新暦の大晦日、友人たち 10 数人とレストランで食事をしました。主催以外は皆、彼の友人ではじめて会う人たちばかりでした。こういった場ではまず主催が一言述べ、白酒（コーリャンを原料としたお酒でその度数は一般に 38～60 度。これをストレートで飲む。）で乾杯となります。その後各人が随時音頭を取り乾杯が繰り返されます。

友人から招待を受けると彼と二人だけで食事をすることは少なく、彼の別の友人も同席します。人数が多く賑やかな雰囲気での会食を好むので、料理一皿の量は多く、またテーブルは大人数で座れる中華テーブル（円形）が一般的です。

料理は食べきれないほど注文され、酔っ払うまで酒を交わし、大きな声で冗談を言いあいます。友人から食事に誘われると忙しくともとにかく顔をだします。昨日、会の途中から同席した若い二人は既に食事を終えお酒も入っていた様子でした。たとえあまり乗り気でなくとも参加します。お酒と付き合いは必須なのです。

私もこういった習慣を知らず、これまで何回か誘いをことわったことがありました。鳥取県と関係の深い友人は何十人といるので、連日飲み会となることも少なくはなく、さらに業務や大学での試験と重なると大変です。

“人脈は宝なり”。ここでは人脈があればたいいのことは人づてで何とかなってしまうのです。

日本で暮らしたことのある友人は別として、飲むうちに戦争時代の話になることもあります。日本は侵略に対して謝罪していないといったことです。

テレビでは戦争を題材にしたドラマが頻繁に放映されています。私が見たのは戦場での熱い友情を描いたものですが、中国人に焦点をあて制作されているので、みているうちに感情は中国側に引き込まれます。仮に、視聴者が日本に対してイメージしやすい“侍”や“刀”といったことが強調されすぎた作品であれば、日本に対する誤解がうまれても不思議ではありません。

しかし人の気質は大きく変わりつつあります。若者のファッションや公共でのマナー、サービスもいわゆる先進国といわれている国のものと同じ方向に向かっていることを肌で感じます。個々の性格もしかりです。

これまで私は国家間、地域間の国際交流について形式的で、それほど肯定的に捉えられない時期もありました。しかし今は違います。ニュースで新聞でラジオで国家、地域の代表団が訪問しあい、握手を交わし、協定を結ぶ場面等を見聞きすることは、想像以上に国民、地域住民に明るい印象を与え、新たな関係を築くの に大きく貢献するものだと思っています。

のこりおよそ 1 ヶ月の滞在、“熱い男たち”と貴重なときを過ごしたいと思います。

（吉林省派遣 竹中和彦）